

(3) 北斗農場の展開過程と現段階における諸問題

— 共同経営の発展の内的基礎について —

北海道大学大学院 小 内 透

— 戦後の農地改革によって創出された自作小農制を基礎とする農業と農村社会のあり方は、戦後日本資本主義の強蓄積の下で、大きく変貌してきた。それは、いうまでもなく、「資本の価値増殖の論理」に基づく農業・農村社会の再編過程にはかならなかった。

しかしながら、同時にそれは農民層の生活の営みを基底にした農民層自身の手による、零細農耕制の桎梏をのりこえることをめざした社会的農業生産組織の創造と、それを基礎としたあらたな農民社会・地域社会の創造の過程でもあった。事実、今日、兼業化した農民層を含めて、機械の共同利用や請負耕作が進展し、さらに共同経営を行う農民も存在している。それゆえ、ここでは、現実に進展している、まさに多様な形で農業生産形態そのものの創造過程を、農民層の生活の営みそれ自体として、正しく事実即って捉え、その発展方向を提示することが不可欠に必要であると思われる。

こうした観点にたつて、本報告では昭和二十二年、北海道西天北集約酪農地域（昭和三十一年指定）に位置する幌延町に入植し、以来三十六年の歴史をもつ安全共同経営・北斗農場を対象として、その展開過程と現段階の諸問題を明らかにし、共同経営という一つの社会的農業生産組織の発展の内的基礎を剔出する。

Ⅱ ところで、従来の共同経営研究においては、多くの場合、共同経営は生産力水準の発展に伴う構成員内部の農民層分解によって解体していくものとして捉えられ、北斗農場の如く長年にわたつて存続している共同経営の場合、その原因を共同経営成立時の特殊な背景及び基礎的条件にもとめ、一般には成立しがたい事例とみなしてきた。事実、北斗農場を対象とした調査研究の多くは、土地所有の制約をうけていない開拓地へ入植したこと、親戚関係あるいは社会主義的集団農場の建設をめざす思想的集団などの特殊な縁故に基づく精神的結びつき等々の北斗農場特有の入植時の背景や条件を、農場の発展の内的基礎として指摘している。

しかしながら、こうした従来の指摘は必ずしも妥当なものとはいえない。なぜならば、そうした共同経営成立時の背景や条件はけつして独立変数としてあるのではなく、共同経営のその後の展開の中で大きく変化する場合である。北斗農場の場合においても、社会主義的な集団農場をめざしたにもかかわらず、構造改善事業（昭和三十八年導入）や公社牧場事業（昭和四十八年導入）などの政府資金を導入し、政府の政策体系の中に組みこまれながら生産力的基礎を充実させねばならなかった。しかも、昭和四十六年には土地所有権の名義変更をめぐって2年間にわ

たる「土地問題」が生じ、解散問題にまで発展した。そして、現在、世交代替（昭和四十七年最初の後継者加盟）というきわめて大きな課題に直面している。

それゆえ、北斗農場の三十六年の発展の内的基礎は、多くの困難を構成員の集団的な力でのりこえながら歩まれた。まさに創造的な過程としての北斗農場の展開過程の特質そのものの中に見出されなければならぬといえよう。

Ⅲ 本報告では、こうした点をあきらかにするために、以下の如き分析方法を用いる。

まず第一に、生産・労働—生活過程分析、とりわけその一つの柱である生活史分析を本報告の中心的な分析方法として用いる。それは、もちろん、婦人層を含めた農場構成員一人一人の入植前生活史の分析としてなされるだけでなく、北斗農場の展開過程の特質それ自体を構成員各自の生活史分析という方法を用いてあきらかにしていくということである。第二に、農民の生活の営為によって形づくられる農場内社会、すなわち農場組織体を、一定の生産力的基盤を伴う協業と「協働」の統一体として把握し、こうした分析枠組に基づいて農場組織体を分析する。

① ところで、協業という場合、本報告では、それをすべての協業に共通する側面である協業の骨格ともいべき組織構造（これ自体、運営機構と労働組織から構成される）と協業の本質的差異（資本主義的協業、家族協業、社会的協業の如何）を表わす側面である協業の生産関係のあり方としての基本構造の二側面から捉える。

② そして、こうした協業の内部で展開される諸個人の相互作用、社

会関係を、それ自体社会関係を内実とする概念であると同時に、そのあり様が生産力的側面をも含意する「協働」という概念で把握する。それは、諸個人の社会関係を問題とする場合、その関係としての形式だけでなく、諸個人が社会関係を結びながら新たなものを創造する側面、すなわち諸個人が社会関係を結ぶことによって生じうる生産力的側面にも注目しなければならぬと考えたからである。そして、それは、北斗農場の場合、家族内協働と農場集団内の協働として分析的に分けて捉えられ

る。したがって、第三に、協働様式としての農場内集団の分析を行うさい、集団の内部構造を血縁のネットワークや農場組織内のフォーマルな地位を誰が担ったかを指標にして明らかにしただけでなく、組織内での集団的討議の内容にまで立入った内容分析（Content Analysis）を行った。それは、北斗農場の場合、非常に真摯で十分時間をかけた集団的討議がなされており、面接調査では把握しえない農場集団の喜び・苦悩・対立・社会関係の特質等々の実相をとりおさえるのに有効であると考えたからである。